

「SF ショートショート」2年目の連載にあたって

松原 仁

(公立ほこだて未来大学)

人工知能学会誌にSF作家の執筆による「SF ショートショート」を掲載するようになって1年が経過した。おかげさまで評判が良いので継続して2年目も掲載することになった。日本SF作家クラブの協力を得てその50周年記念プロジェクト(略称: SFWJ50)と連動した企画であり、執筆とイラストは日本SF作家クラブの会員の皆様をお願いしている。引き続き協力していただいている日本SF作家クラブならびに作家の皆様に深く感謝する。

「ショートショート」といえば星新一さんであるが、このたび「星新一賞」という新しい文学賞が設立された。「ショートショート」の作品を募集しているのだが、理系の文学賞を標榜しているのが大きな特徴である。そもそも理系文系という区分をするのが良くないとは思いつても、世の中はやはりはっきりと理系と文系とが区別されており、文学賞というのは文系の範疇で理系とは縁がなかった。人工知能学会は理系の学会に分類されると思うが、その中では文系の色合いが比較的濃い。SFを始めとした小説好きが理系の中では多いほうである。それは人工知能が人間を目標にしている、研究者が基本的に人間好きなためだと思う。人間を知るためには小説を読むのが従来から有力とされている方法である。人工知能学会は縁があってこの「星新一賞」に協力している。1万字以内の「ショートショート」の作品を募集してい

る。文学的な表現よりも科学的なアイデアを重視した賞になっているので、小説は書いたことがなくてもおもしろいアイデアをもっている人にチャンスがある。人工知能学会誌のこの「SF ショートショート」の連載を読んで刺激を受けて、ぜひ「星新一賞」に応募していただきたいと期待している。論文を書くのはもちろんとして、たまには小説も書いてみましょう。新しい研究の展開があるかもしれません。

「星新一賞」のもう一つの特徴は、応募条件が人間に限らずに人工知能による作品も認めていることである。これは筆者らが開始した「きまぐれ人工知能プロジェクト 作家ですよ」というコンピュータに星新一さんのような「ショートショート」を自動生成させることを目指したプロジェクトを想定してもらったものと思う。我々だけでなくぜひ多くの方が「ショートショート」の自動生成に取り組んでいただけたらうれしい。また完全な自動生成でなく、人間がコンピュータの支援を受けて共同で「ショートショート」を創作するというのであれば、今でも十分に可能性はある(一部の小説はすでにそのようにして創作されているという話もある)。将来、コンピュータが創作した「ショートショート」が人工知能学会誌に掲載されることを期待している。

では、引き続き「SF ショートショート」を楽しみましょう。